

隨泉寺寺報

平成 26 年 (2014 年) 8 月号 第 528 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

お盆会法要

講師 住職自修

講題 『お盆を迎えて』

■盂蘭盆会法要 ～縁のある人々のご恩を偲ぶ法要～

[盂蘭盆会・うらぼんえ]とはインドのサンスクリット語のウラバンナ(逆さ吊り)を漢字で音したもので、転じて「逆さまに釣り下げられるような苦しみにあっている人を救う法要」という意味です。

・お盆の行事はお釈迦さまの弟子の一人、目連尊者(もくれんそんじゃ)が母を救う話に由来しています。

お盆の日には地方によって異なります。

◆東京など都市部では、

7月13日～16日(4日間)に行うことが多いようです。

◆地方では、

8月13日～16日(4日間)

※初盆追悼法要

去年(平成25年8月1日)から今年(平成26年7月31日)までにお浄土に還られた方々です。いずれも懐かしい方々です。

初盆追悼法要を勤めます。誘い合わせてお参りください。

8月16日午後1時30分よりお勤め致します。

8月の法座予定

8月 2日……………本部役員会

8月17日……………掃除 竹やぶ伐採 井原・役員

8月16日朝席午前10時より……………お盆会法座

8月16日昼席午後1時半より……………初盆追悼法要

9月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆平成26年初盆を迎えられる方

植木 始	釋孝徳	平成25年8月12日	94才	荒野
林 龍子	釋明龍	平成25年8月13日	96才	八本松
宮城 豊治	釋清豊	平成25年8月17日	71才	上平原1
佐々木千津子	釋常光	平成25年8月18日	65才	荒野
清水 寶作	釋寶樹	平成25年8月29日	87才	他所
植木 亨	釋亨直	平成25年9月13日	67才	他所
智谷 秋宣	教証院釋秋宣	平成25年9月24日	90才	瀬野
上平 トシコ	釋得証	平成25年9月26日	83才	井原
木原 数義	釋願船	平成25年9月29日	79才	長者原東
大垣 淳子	釋淳信	平成25年10月5日	89才	他所
西岡 為文	釋精超	平成25年10月7日	86才	出口宮原
西田 ミコ	釋清都	平成25年10月15日	96才	出口宮原
土本 隆弘	釋智隆	平成25年10月19日	22才	他所
上田 島野	釋清島	平成25年10月20日	104才	平原上2
谷本 好子	釋相好	平成25年10月22日	90才	平原西
青木 信子	釋淳信	平成25年10月27日	74才	他所
休場 修	釋修善	平成25年11月12日	73才	中須賀
前座 久生	釋久遠	平成25年11月21日	66才	平原上第1
岡崎 勝治	釋浄勝	平成25年11月27日	74才	鴨巢
早稲田 ルイ	釋尼妙応	平成25年12月5日	97才	望ヶ丘
国本 千鶴子	釋浄千	平成26年1月4日	76才	鴨の巢
市田 署	釋浄署	平成26年1月11日	82才	平原西
久保 久男	釋英道	平成26年1月15日	92才	平原東
松本 由江	釋珠心	平成26年1月17日	89才	中須賀
小西 キエ	釋尼妙称	平成26年1月18日	84才	長者原西
馬場 武義	釋成覚	平成26年1月27日	75才	出宮
今田 治衛	釋聞治	平成26年2月27日	75才	望ヶ岡
椿谷 佐登子	慧光院釋弘誓	平成26年3月1日	85才	長者原東
為田 至	釋至願	平成26年3月2日	81才	他所
中本 マツエ	釋住安	平成26年3月2日	103才	平原上1
出口 元司	元浄院釋俊榮	平成26年3月5日	89才	出宮
松原 正記	釋正念	平成26年3月5日	61才	他所
三原 美代子	釋清美	平成26年3月5日	81才	瀬野川団地
井上 誓雄	釋大誓	平成26年3月7日	96才	出宮
朝信 マス枝	釋枝法	平成26年3月12日	82才	平原西
品川 益代	釋浄益	平成26年3月16日	80才	他所
奥本 光男	釋清光	平成26年3月17日	70才	出宮
三ヶ津 勝義	釋勝解	平成26年3月20日	79才	平原東
足立 綾子	釋大慈	平成26年3月24日	90才	他所
加藤 二三枝	釋尼貞誠	平成26年3月25日	97才	井原
七竹 則男	釋然則	平成26年4月24日	67才	平原上1
岡崎 千代子	釋千由	平成26年5月8日	95才	高部
横崎 泰憲	釋泰善	平成26年5月25日	67才	荒野
中村 敏子	釋誓妙	平成26年6月1日	78才	出宮
松本 武雄	釋武講	平成26年6月1日	68才	中須賀
橘 しづゑ	釋静心	平成26年6月27日	92才	モンライ
岩崎 幸子	釋尼好春	平成26年7月6日	82才	井原
岸岡 祐二	釋清祐	平成26年7月23日	86才	鴨の巢

☆ 8月 浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著

『あけぼのすぎ』 -- 浄土真宗一口法話 -- (西光義徹)

「仏様というのは【なんまんだぶつ】という響きです」

二〇〇一年七月三十一日

シアトル 院の皆さん。ようこそ本願寺へお参りに来て下さいました。

今日は朝早く起きて、この御御堂で、ご一緒にお正信偈をお勤めできたこと、素晴らしいことです。

皆さんで、ご奉仕のお掃除を下さって有り難うございました。

夏休みに、皆さんが、京都の本願寺まで来て下さったのは、阿弥陀如来さまの願いを聞くためです。分け隔てなく私達一人ひとりを見守り、支えて下さる阿弥陀如来さまです。他の人と自分を比べて、自分の方が優れていると思いがったり、反対に劣っていると小さくなってしまわずにはなく、どんな時も阿弥陀如来さまと一緒にいて下さることを思い出して、自信を持って毎日を過ごしましょう。

おうちに帰られたら、本願寺で見たこと聞いたこと、新しく出来たお友達のことを、お話してください。楽しく、安全な旅をされますよう。

8月 このまんまの私が仏さまのお目あてであった 東井義雄師 カレンダー法話 大いなるみ親

の救いの目あては、この私であったのです。しかし、努めても、努めても、「死にともない心」を、どうしても超えることができないのです。浄土真宗のものだけでなく、他宗のものも、キリスト教のものも、「死」の問題にかかわりのありそうな書物を見つけては、読みあさりました。「死」の問題にかかわりのありそうな文学作品も、ずいぶん読みあさりました。でも、どんなにしてみても「死にともない心」を超えることができないのです。

これは、私の真剣さが足りないからだと考えました、朝は、四時起床ということにしました。そして、起きると、冷たい水で、体中を摩擦して、体中に目を覚まさせ、それから朝の勤行、勉強…というようにして、毎日をスタートしました。そのことを、 に人に話した覚えもないのに、同僚の一人が「近頃のアなたには、何か、鬼気のようなものを感じる」といつてくれたこともあります。でも、やっぱり、「死にともない」のです。何年たっても、何年たってもダメでした。

これは、「死」を、まだまだずっと先のことだと考えているためではないかと、考えました。それで、父が亡くなった年齢である、六十三歳の十一月三十日を私の最期の



日と、心に決めました。

午前四時起床、全身の冷水摩擦、勤行、勉強・・・という毎日を、心に決めた「私の最期の日を目指して、何年、年を重ねたことでしょう。でも、どこまでいっても、やっぱり「死にともない」のです。

とうとう、六十三歳になっても、十一月になっても、あせっても、あせっても、というよりは、あせれば、あせるほど、よけい「死にともない心」が、力を増す気さえするのです。

そして、どうにもならないまま、十一月三十日を迎えてしまいました。どうにもならないまま、その日が暮れ、遂に、空しくその時刻を迎えてしまいました。

精も根もつき てて、如来さまの前に額づいたまま、頭が上がりませんでした。ずいぶん、長い間、頭の上がらないまま、額ずき続けていました。

その私に、声が聞こえてくださいました。はっきり、聞こえてくださいました。それは、『歎異抄』第九のおことばでした。

「念仏申し候へども、踊躍歓喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候は は、いかにと候ふべきことにて候ふやらん」と、親鸞聖人にお尋ねした唯円房さまのお声でした。ハッとしました。唯円房さまは、後の世に生まれてくる「死にともない私」に代って、「私」のために、この質問をしてくださったのだと思いました。

その質問に対して、親鸞聖人が、「死にともない私」をお叱りになるのではなく、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」と、「死にともない私」のためにお答えくださっているのを感じました。親鸞聖人が、高いところからではなく、「私」と同じ座までおりて、大きくうなずきながらお答えくださるのが何ともいえず、ありがたく思われました。そして、「よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこば 」「にて」「いよいよ往生は一定とおもひたまふなり」「よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり」「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と、答えてくださっているのです。

「われら」の中に、親鸞聖人も、唯円房さまも、「死にともない私」も、含めてくださっているのが、何ともありがたく思われました。三人で、ご一緒に、「煩惱具足の凡夫」をお目あてに現われてくださった、真如の月を仰がせていただいているような感動がこみあげてきました。「死にともない私」のままでよかったのです。「死にともない私」を「殊勝な私」にする必要はなかったのです。「死にともない私」を「殊勝な私」にする力など、「私」にはなかったのです。そんな力が「私」にあるのだったら、「他力の悲願」などなかったのです。

「なごりおしくおもへども、娑婆の縁尽きて」「ちからなくしてをはるときに」「かの土」へまいらせてもらうのです。よろこび勇んでではなく、しようことなしに、「いそぎまいりたきころなきものを」「ことに」「あはれみたま、ごみ仏のところに帰らせていただくのです。「死にざま」をとり繕う必要なんか、微塵もなかったのです。七転八倒、「死にともない」と、わめきながら終ってもまちがいなく、撰め取っていただける世界が、既に成就されていたのです。